

弥生の出雲王に出会える

季刊

第42号

(2021年7月)



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

★夏季企画展

「いつまでも戦後でありたい2021」
〜大社基地の記録と記憶〜

7月17日(土)〜9月20日(月・祝)

アジア・太平洋戦争が終結してから76年が経ちます。この年数は日本で戦争が起こらない限り延び続けていきます。

しかし、ひとたび戦争が起こると、年数はリセットされ、再び戦後1年、2年…と数字を積み重ねていかなくはなりません。

「戦後何年」という言い方がずっと続いて欲しい

1945(昭和20)年3月13日、東京大空襲の3日後に生まれた俳優吉永小百合さんの言葉です。「戦後何年」という言葉は、未来永劫リセットされずに受け継がれなければならないバトンなのです。

この一助となればと、近年、当館が継続して開催しているのが「いつまでも戦後でありたい」と銘打った展覧会です。今年度は、島根大学と共同で「大社基地の記録と記憶」に焦点をあてて開催します。

「大社基地」とは、大戦末期の1945年3月から6月にかけて今の斐川町出西やその周辺に造ら

れた旧海軍大社基地のことで、主要滑走路や物資保管壕などの関連施設の一部が残っています。

この基地の建設には、境港にあった美保海軍航空基地の予科練習生約4000人のほか、周辺住民や学童までもが加えられ、総勢約6000人が動員されたようです。

また、最新鋭の攻撃機であった「銀河」が配備された西日本最大の軍事拠点であったため、終戦間際の7月28日には米軍機による空襲を受けて、3人以上の人が亡くなりました。

今回の展覧会では、島根大学が進める戦争関連資料の調査から垣間見えてきたことや、当時を知る周辺住民の聞き取り調査の成果をパネルなどで紹介するとともに、旧海軍や大社基地に関連する品々を展示します。

さて、大社基地の東方約4kmの地点には、弥生時代の大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡があります。見つかった銅剣、銅矛は実用品の武器ではありませんが、弥生時代に始まった組織的な争い、つまり「戦争」を象徴するものと言えます。以降、日本列島では数々

の戦争が断続的に繰り返されてきました。では、それは一体いつまで続いたのでしょうか? 今のところその答えは1945年まで、と言えるでしょう。

大社基地は、アジア・太平洋戦争の終結の象徴として重要な意味を持つ遺構です。しかし、私たちが世代をこえて二度と戦争を起こさなければ、大社基地は弥生時代から日本列島で繰り返された戦争の最後の爪あとしとしての意味も合せて持っているのです。

「戦後何年」という言葉がこのまま続く限り、この出雲は、日本列島における戦争の始まりと終わりを象徴する二つの遺構を有する稀有なまちであり続けるのです。

(三原一将)



展示の準備を進める島根大学生

★ギャラリー展

「暁の超特急 吉岡隆徳
出雲から世界へ」

7月7日(水)～8月30日(月)

「ヨシオカ！ヨシオカ！」

1932(昭和7)年8月2日、ロサンゼルス五輪大会のグラウンドで、スタンドの歓声を一身に浴びる選手がいました。出雲生まれのスプリンター、吉岡隆徳です。抜群のスタートダッシュと日の丸のハチマキから「暁の超特急」と呼ばれた隆徳は、当時、日本が世界に誇るトップランナーでした。

1909(明治42)年6月20日、隆徳は簸川郡西浜村(現 湖陵町大池)にある、彌久賀神社の宮司を務める春日家に生まれました。四男の隆徳は、西浜村尋常小学校卒業後、春日神社(斐川町今在家)宮司の吉岡家の養子になりました。

隆徳は教員を目指し直江村尋常高等小学校に進みましたが、中学校へ進んだ同級生たちにコンプレックスを感じるようになります。養父にぜひ中学校へと訴え、一年で杵築中学校(現 大社高校)に転入しました。中学へは湖陵の生家から通い、陸上部では子ども時

代に湖陵町西浜の砂浜を走り回って鍛えた足腰と、斐伊川の土手で猛特訓した脚力を武器に、大いに活躍します。1年生にして、山陰陸上選手権大会のメドレーリレーで第一走者に抜擢され、大会当日は、隆徳がトップで渡したバトンを上級生がつなぎ、杵築中チームは見事優勝を果たしました。

隆徳は自伝で、自分が肉体的にも精神的にも大きく成長したのが中学時代であると語っています。その大きな力となったのが、片道1時間半もかかった通学です。家から江南駅までの約6kmと、大社駅から杵築中までの約1kmの往復15kmに及ぶ長い道のりを、走ったり歩いたりしながら学校へ通っていたそうです。

島根県師範学校(現 島根大学の前身の一つ)から東京高等師範学校に進んだ隆徳は、山陰、日本、アジアの大会で結果を残し、活躍の舞台を広げていきました。

そしてついに、ロサンゼルス五輪大会、男子100m決勝に進出します。予選を勝ち抜いた選手は、欧米やアフリカ出身の、体格に恵まれた者ばかりです。ピストルの音で一斉に駆け出す

選手たち。いちばんに飛び出した隆徳は、そのまま60mまでトップをキープしました。結果は6位でしたが、その走りに心を動かされた観客は、「YOSHIOKA!」と盛大な歓声を送ったのです。今回の展示では、走ることに人生をかけた、出雲生まれの名ランナー、吉岡隆徳を紹介します。

(浦上晴奈)



▲隆徳

ロサンゼルス五輪大会 100 m短距離走 決勝



決勝で着ていたユニフォーム(松江歴史館蔵)

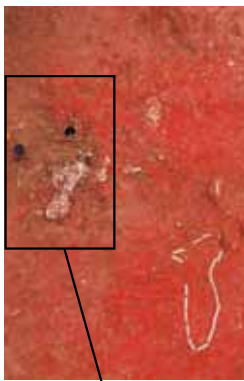
★新米学芸員のつぶやき

「なんだか茶色っぽい…?」

西谷3号墓、女王の墓穴からは、ガラス製の副葬品がまとまって出土しました。

その出土状況を見て私は気付きました。なんだか水銀朱の一部が茶色っぽく見える…?(左の画像参照)しかし、この赤い水銀朱は約1800年の時を経て出土したものです。多少の色むらがあってもおかしくないのかなと、深く考えませんでした。

後日、発掘調査報告書から、この茶色はなんらかの有機物つまり木箱などの容器があり、その中にガラス製品が入られていた、という推測をみつけました。なるほどと思うとともに、ささいな疑問も、そういうものだと流さずに、どうしてだろうと考えることの大切さを学びました。



茶色っぽく見える…?

▶西谷3号墓 女王の墓穴副葬品とその出土状況

★速報展

「文化財を受け継ぐ」

鰐淵寺の建造物

開催中（9月27日（月）

1400年もの悠久の歴史と数多くの寺宝を今に伝える天台宗の古刹、鰐淵寺。四季折々の美しい風景が広がる境内は、2016（平成28）年3月、その歴史的価値が認められ、国史跡に指定されました。

境内に現存する建物の多くは江戸時代、古いものでは約350年前に建立されたものです。そのうち、釈迦堂と開山堂は屋根全体の腐食が進んだことで雨もりが生じ、緊急の対策が必要な状況でした。このことから、2016（平成28）年度から5年をかけて、2つの建物を中心に保存修理を行いました。

釈迦堂は、釈迦如来を本尊とする仏堂で、境内に残る建造物のなかでは最古のものです。修理に伴う調査の中で、建立の年月等を記した板（棟札）や部材に墨で書かれた年月（墨書）などを確認し、寛文4（1664）年建立の可能性が高まりました。

開山堂は、境内北東の小高い丘



修理が完了した開山堂（手前）と開山廟（奥）

の上に位置する江戸時代（17世紀後半）のお堂で、釈迦堂よりわずかに規模が小さい建造物です。今回の修理では、半解体修理を行い、腐食した部材の取替え、屋根の葺替え（銅板葺）工事を実施しました。そのほか、仁王門や開山廟などの建造物も修理が完了し、史跡の環境が整いました。

今回の速報展では、2020（令和2）年度に完了した保存修理工事の状況と、建物の修理によって新たに分かったことを中心に紹介します。（吾郷 誠）

★古文書の森をゆく⑦

「高知への旅日記をよみとく」

江戸時代、出雲に住む人々は寺社参りや商売、学問修業など、さまざまな目的で他国へ出かけていました。多伎町口田儀で廻船業を営む鳥屋尾彦左衛門もその一人です。彼は家業と共に鉄師・田儀櫻井家の幹部を務め、鉄の販路をさらに拡張しようと大坂や四国、九州など幅広い地域で営業活動を行いました。商いのため諸国へ向かう様子を記した「道中記」が今も残されています。古文書をよみとくとき、彦左衛門が土佐（高知県）へ出張した旅を追ってみましょう。

天保6（1835）年5月1日、彦左衛門はまず陸路で中国山地を越え、口田儀―佐田―赤名（島根県飯石郡飯南町）―三次（広島県三次市）から4日に尾道（同県尾道市）まで南下しています。計算すると1日40kmを歩き通すことになるのですが、彼はこの時40代半ばであり、かなりの健脚ぶりが伺えます。

尾道からは瀬戸内海を船で渡り、善通寺（香川県善通寺市）に滞在しつつ金刀比羅宮へ参拝します。13日頃に高知へ着き1か月ほ



「讃岐象頭山遠望」『六十余州名所図会』一部（国立国会図書館デジタルコレクション）

ど滞在し、出雲へ帰国したのは6月29日でした。

道中記には道のりだけでなく、お茶や宿泊、たばこ代など支払いが細かく記されています。それを見ると、わらじなどの履物は2日に1度と短いスパンで履き替えていて、手頃に購入する消耗品だったことが伺えます。また昼食をみると、讃岐（香川県）に着いたとたんもつばら「うどん」代になっています。仕事の出張中でも、名物をかかさず楽しんだようです。

このように古文書をよみとくと、当時の人がたどった道のりや旅の様子を今も知ることができ

（春日 瞳）

★体験コーナーのご案内

7月から当面の間、出雲弥生の森博物館1階の体験コーナーにある、体験プールに「弥生の森の魚釣り」を設置することとしました。このコーナーでは、1300年前に書かれた書物「出雲国風土記」にも載っている海の生き物などを釣る疑似体験ができます。

博物館を訪れた際には、ぜひ、体験コーナーにも足を運んでみてください。



▶弥生の森の魚釣り

★展示のご案内

▼夏季企画展

7月17日(土)～9月20日(月・祝)
「つつこでも」

戦後でありたい2021

～大社基地の記録と記憶～

●ギャラリートーク

8月22日(日)

9月12日(日)

※いずれも10時から

▼ギャラリー展

7月7日(水)～8月30日(月)

「暁の超特急 吉岡隆徳」

●ギャラリートーク

7月11日(日)

7月22日(木・祝)

8月15日(日)

※いずれも10時から

▼速報展

好評開催中～9月27日(日)

「文化財を受け継ぐ」

鱧淵寺の建造物

※いずれも観覧料は無料です。

お待ちしています!



★館長古来夢

ここ数年、広島県三次市の寺跡に関わっている。平安時代の仏教説話集『日本霊異記』に登場する「三谷寺」の遺跡ではないかと推測される寺町廃寺跡(国史跡)だ。飛鳥時代(七世紀後半)に建てられたこの寺跡の軒先を飾った瓦(軒丸瓦)は、一〇〇km以上東に離れた、岡山県総社市の栢寺廃寺跡の紋様型を持ち運んで作られたことがわかっていく。

今年の四月、栢寺の瓦の調査に同行し、寺町の軒丸瓦と比較した。型が同一ということは間違いない。「三谷寺」を造った百濟僧弘濟は、瀬戸内を船で帰る途中に賊に襲われ海に入るが、難波(大阪)で助けた亀の恩返しにより、備中の浜に上陸し、その後、無事、寺に帰ったという。栢寺から寺町へと移動した瓦の紋様型は、まさに弘濟禅師の足跡と重なる。

調査の翌日、久しぶりに岡山市造山古墳を訪ねた。日本遺産「桃太郎伝説の生まれたまち おかやま」に認定されてビジターセンターができていた。全長三五〇mの墳丘は雄大なことこのうえない。前方部には、荒神社が祀られて

おり、その手水鉢は石棺(石材は熊本産)が転用されている。神社の傍らに「疫神」の文字を彫り付けた石が立っていた。巻かれたしめ縄は新しく、供えられた花も瑞々しい。感染症流行のただなかに居ることを吉備路でも感じた。

(花谷 浩)



(発行) 出雲弥生の森博物館

2021年7月

〒693-0011
島根県出雲市大津町2760
(TEL) 0853-25-1841
(FAX) 0853-21-6617
(E-mail) yayoi@city.izumo.lg.jp
http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

- 入館料/無料
- 開館時間 / 9:00～17:00
(入館は16:30まで)
- 休館日 / 火曜日
(祝日の場合は翌平日)
年末年始

